

インド・ブータン農産物物流視察 ⑥

コールドチェーンの地図をゼロから描く

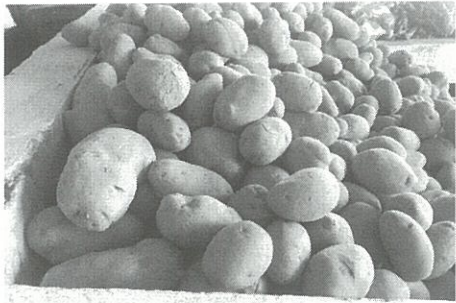


農産物輸出のカギとなる  
コールドチェーン

ブータン南端にあるインドとの国境の町、プンツォリンの町と接し、古くからインドとの輸出入の拠点となる「物流都市」だ。1962年にブータン初の自動車道路として整備されたプンツォリンと首都ティンプ

ーを結ぶ国道は、ブータンが依存するインドからの物資の供給を担う大動脈となっている。しかし、ブータンからインドへ戻るトラックの「帰り荷」は少ない。ブータンは豊富な水資源により発電した電力をインドに輸出しているが、ブータンの野菜・加工品をインド、さらには海外に輸出できれば外貨獲得を拡大できる。そのカギとなるのがコールドチェーンだ。

ブータンの主要作物のひとつがジャガイモ。ブータンでは初夏に収穫され、6月から11月にかけてインドに輸出される。冷蔵・定温倉庫がないためジャガ



主要作物であるジャガイモ

イモを長期で保管できず、結果、収穫されたジャガイモをインドに「安売り」せざるを得ない。ブータン産ジャガイモは農薬不使用で品質が良く、インドの都市部で「インド産ジャガイモ」として高く売られることもある。そして、収穫期が終わったブータンは逆にインドから高価なジャガイモを輸入しているのだ。

川崎陸送では昨年11月28日、地元の有効企業グループであるシンゲ・グループとMOU(覚書)を締結し、ブータンにおける定温・冷蔵倉庫の整備について協力していくことで合意した。同グループではブータン西部、南部に広大な土地を有し、その土地に定温・冷蔵倉庫を建設する計画を進める。ブータン産野菜の安定した国内供給とともに、倉庫内で流通加工など付加価値を高めた野菜の輸出促進も期待できる。建設候補地としてプンツォリンの産業エリアに立地する同グループの工場隣接地3カ所を検討中だ。



友好のバッヂを胸に農林省を訪問

商業・農業の振興と農産物の輸出による外貨獲得を目指すブータンで、定温・冷蔵倉庫に対する潜在需要は大きい。Food Corporation of Bhutan. (FCB=ブータン食糧公社)では、

品質維持のため産地周辺や消費市場での定温・冷蔵倉庫の整備の必要性を指摘する。同国農林省によると、インドとの国境があるゲレフ、サムドラップ・ジョンカー他、チュカなど国内18カ所に青果だけでなく薬なども保管できるような定温倉庫の建設を希望している。日系企業のコールドチェーンの知見と投資を歓迎する一方、利用料金に対する周知な姿勢もうかがえる。

「長期戦」を戦い抜いた  
企業が勝者に

インドに進出する日系企業は1400社を超え、日本貿易振興機構(JETRO)によれば黒字企業比率も65%を超えた。一方、ブータンと日本の関わりはODA(政府開発援助)が中心で企業の進出は極めて少ない。両国は市場規模こそ大きく異なるが、その独特な政治・宗教的背景や国民性により、いずれもビジネスは「長期戦」となると感じた。しかし、インドの農民の貪欲なまなざし、ブータンの若き起業家の清々しい事業意欲からは両国の変化の胎動を感じる。これらを羅針盤に長期戦を戦い抜いた企業が勝者になると確信している。

〈完〉